

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

新春放談

トラの親、トラの子を語る 2

走る・その一

デイヴィッド・グッドマン 26

キリコのコリクツ

玖保キリコ 11

映画時評

高橋悠治 28

料理がすべて・特集

田川律 14

音楽時評

坂本龍一 30

埋草通信 東北の神武たち

鎌田慧 23

VOL.8 NO.1

毎月1回・10日発行

定価200円

新春放談

トラの親、トラの子を語る

津野海太郎・鎌田慧・平野甲賀
高橋悠治・平野公子・八巻美恵

津野 鎌田さんちは、お子さん何人？
鎌田 なんだよ、急に座談会用の声だして。

津野 何人？

鎌田 三人。上が十九で浪人でしょ。

その下が高一。その下が中一の男。

津野 高一ってというのは女の子だろ？

むかし君がつかれて歩いてた可愛い子だろ、仕事先やなんか。

美恵 そうそう。腕にぶらさがっちゃ

って。

甲賀 うちのタンも、こんど高一だも
んね。

鎌田 悠治のこの家族構成って？

悠治 子供は二人だけど、子供と家族

構成とはちょっとちがうよな。

甲賀 生まれたんじゃないの、孫、ア

ユオんとこ？ まだ？

美恵 期待してただけどき、孫が生

まれる前に別れちゃったの。

鎌田 しかし、高橋悠治に孫が生まれ

るなんて悲惨だよな。

美恵 どうして？

鎌田 うん。だって、ねえ。なんとなくイメージが……

甲賀 おじいちゃんか。

鎌田 二人っていうのは、いくつとい

くつ？

悠治 待てよ、ハヤはいくつだろう。
十三か。そうすると、アユオが二十五

になるわけかな。

鎌田 平野さんとは？

甲賀 年がわかんないんだよな。中三
と六年生と三歳。

津野 いちばん上が生まれた時が三十
五、六か。

甲賀 そんなにいてないよ。七〇年
だから。あいつのおかげで結婚したん
だもん。

悠治 フッフッフ。

津野 結婚式はやってないよな。悠治
はやった？

悠治 えー……

美恵 ハッハッハ、どうだったんでし
ょうね。

津野 むずかしい質問しちゃった。

鎌田 じゃあ、津野海太郎が結婚しな
い理由をちょっと……

津野 またまた。ないよ、そんなの。

美恵 結婚しなくてもいいけどさ、子
供ほしいかと思ったことない？

津野 そういう時期もあったね。三十
代の終わりごろ、なんかジタバタした
ことあったな。二、三年くらい。ふし

ぎな気がするよ。あの子、たとえば家
庭アルバムなんてつくる？

悠治 いま？

津野 うん。おれが育った家にはあつ
たわけよ、家庭アルバム。ばあさんの
写真とかおやじの学生時代の写真とか
があつてさ、赤ん坊のおれがハダカで
いたりとかさ……

美恵 見たーい。

甲賀 男の子は素っ裸で撮るんだよ、
オチンチン出して。

津野 ふつうそういうの、あるじゃな
い？ だけど、おれなんか自分の写真

はいっさい保存してないわけよ。もし
自分に家族がいたとしたら、ちゃんと
とっておくのかな？

甲賀 おやじの写真はあんまりないん
じゃないの。

悠治 そうね。子供のアルバムはつく
るけど、親のアルバムなんかつくんな
いよ。

甲賀 むかしはそういう節目みたいな
のがあった。おやじが出征する時に撮
っとくとかね、髪の毛が長いうちに。

そういう写真は見たことある。おばあ
ちゃんといっしょに三越の写真館で撮
ったやつとかさ。

津野 おれも自分の写真なんかとって
おこうとは思わないけど、ここで終わ
ってしまおうれと、このさき孫もでき

てくるであろうきみたちとの差がある
のかなと。

悠治 うちだってアルバムはあったん
だよ。しかし、その家庭は壊れたわけ
だからね。

津野 なるほど。

悠治 だからアルバムはないわけよ。

鎌田 職業によるんじゃない？ 炭鉱
夫のところはあるよ。つぶれた炭住にア

ルバムや位牌がころがってる。だから
死ぬとか危険のあるところではつくるん
じゃない？ 日常化してくるとつくん
ない。

美恵 うちには撮ったわよ、ハヤが中学
に入學するとき、写真館にいった。

悠治 そう、制服制帽でな。

甲賀 松山猛の「父親クラブ」ってい
う本があつてさ、父親がわが子につい
てしゃべってて、おれと室謙二のもの入
ってるんだよ。室なんかは「おやじを
演じてる」とかさ、そういうふうにい

うんだよ。おやじという役割を演じてるって。

鎌田 親っていう意識はいつ発生するんだろね。おれなんか、どっかに行ってる時に子供が生まれたんだからさ。美恵 いちどもいたことないの？

鎌田 うーんと、下の女の子の時はいたのかなア。あとは病院で勝手に生んだだけどね。美恵 勝手にだって。

鎌田 帰ってくるって生まれてるといって感じなんだから。

甲賀 それも面白いかもしれないな。鎌田 面白かったって、きみ、生まれるのは知ってるんだからさ。なんにも知らないうちに、帰ってきたら生まれてたってんじゃないんだからさ。ウッフッフ。

津野 で、鎌田さんはいつ父親の意識が生まれたの？

鎌田 入学式の時かな。母親ってのは、

あれ、入学式らしいね。梅の花が咲いてて桜の花が咲いてて、校門のところに子供をつれていった時、母親の感慨ってのがあるんじゃないの？

津野 おれなんか自分の親を見てると、ずっと親以外の何者でもないと思ってる、親が親じゃない部分もある人間だというふうに思えるまでには、ずいぶん時間がかかったという気がするんだけどさ。

鎌田 親だって親ばかりやってるわけじゃなくて、仕事している自分がどうなるかだって、ぜんぜんわかんないわけじゃないか。

津野 そうだろ。子にとっての親というだけで生きてるわけじゃないんだからさ。ところが、そういうところがなかなかに子供には見えないじゃねえか。いまの子にはもっと早く見えるのかね。

甲賀 それは子供に聞いてみないと。津野 じゃあ、確固たる親を演じてる

わけでもないんだな。

美恵 演じてみればいいのにね。

津野 理想の父親像とか？

悠治 もう信用されないよ。

甲賀 うん。やっぱり見ぬかれてるんだろね。

鎌田 高橋悠治なんか二十二か三で親になって、その時の親の意識ってどうなんだい？ かなり希薄？ 当然、自分の人生だってわかんないもんね。

悠治 その頃はあまり仕事がなかったからさ。子守が専門みたいなもんだからね。母親のほう働いてたから、おむつ変えたりして、帰りをお待ちするわけよ。それをしばらくやってたから、そういうのを親の感じていうんだ。たら、そういう感じはあったよな。

美恵 どういうのを親の感じていうんですか、そういうのでなければ？

悠治 えっ？ だから、必要に応じて出てくるんじゃないの。世話しなけれ

ばなんない時に世話していれば親になるわけだし。だれか他にいてほっとけば、それでいいわけだし。

甲賀 月並なこといえば、女のほうが、やっぱり親になるのは早いだろうね。

津野 でも、おれの見ている範囲では、離婚した時なんか男のほうがこだわるぜ、子供に。

甲賀 うん。離婚して女のほうに子供をおいてくたさる。しかし、土日は父親面してたずねてくわけよ。

悠治 やったやった。

甲賀 ハッハッハ、おれもそうなると思うけどね。

悠治 アメリカの場合は、そういうふうには法律で定まっているんだよ。離婚した場合は、だいたい母親がひきとることにきまっているわけ。そして父親は養育費を送るの。養育費ってのはね、収入の十分の一か、あなところ百ドルかな、そのどっちが多いほう。いや、少

ないほうだったかな？ とにかくどっちかを選んで送る。十何年前ね。それで週に一回、子供に会うことを認められるのね。権利ね。そうしなければ、どんだんその権利がなくなるわけだから、それはもう一所懸命やるわけよ。

日曜日ごとにつれだしにいつてき、遊園地なんかについて、夕方につれもどすんだけど、アパートの下まで行って部屋には入らない。そういう仕組みになってるから、別れた相手とは顔は合わせないわけよ。うちはそうじゃなかったけど。再婚した相手ともつきあってたからさ。

津野 きのうテレビでやってたけど、いまアメリカで行方不明の子供が年間で十万のオーダーなんだって。それも百万に近いわけ。で、そのうちの七、八十パーセントは別れた父親が誘拐したやつなんだって。

鎌田 ふーん。それで誘拐罪なのか。

悠治 そう。だから誘拐して他の州に行っちゃうの。警察っていうのは州単位だからさ、そうなるよ、ちょっともうわかんなくなっちゃう。

甲賀 ずいぶん父親意識がつよいんだな。鎌田さんだったらやるかね、そういうふうには？

鎌田 おれはやらないね。

悠治 日本に戻ってきて、いちばんちがうなと思ったのはそういうことだよ。離婚するじゃない？ 子供は母親のところにいくよな。そしたら「あのお父さんは……」とかいって会わせないわけよ。それで大学入試のときになって、

やっぱりなんかかっていうんで十何年ぶりに会ったとか、そういう具合になるわけじゃん。

津野 そういうこと、なかなかうまくいってないね、おれの周囲では。

美恵 でもさ、うまくいかないってのがふつうよ。それがうまくいくんだっ

たら、なにも離婚する必要がないんだから。

悠治 そうかな？

美恵 中学生ぐらいになったら大丈夫だね、親がどうなっても。十歳ぐらいまでだと、そうとうひきずられちゃうみたい。

公子 十二歳ぐらいまでね。

鎌田 このあいだ教護院って、むかしの感化院みたいなところで非行少女に会ってきたの。小学校のとき親が離婚して男親がひきとったんだけど、すごくまじめな親で、子供らしいかわいいものを買ってほしいっていても、わかんなかったらしいんだ。それで万引をはじめた。そういうこまかいことってわかんないもんね、男親だと。

公子 でも藤本和子さんとこなんか見るとさ、デイヴィッドがお母さんみたいよ。だから女の人だからお母さんというわけではないんじゃないかな。

鎌田 ああ、そうか。

公子 あたしなんか、実務的にはお母さんの仕事に慣れてるけど、あんまりお母さんみたいじゃないと思ってるわけ。女の人のほうが向いてるというのは、たんなるクセとか習慣でさ。デイヴィッドなんかには、そういう習慣を自分の生活にとりこみたいという気持ちがあるから——そういうふうを意識する人ってめずらしいのよね。

美恵 そうねえ。

津野 なんだよ、鎌田さん。疲れたみたいいな顔してるじゃない？

鎌田 いや、おれ、親として何をやってたかって考えてみると、あんまり実感ないんだよな。家にいないんだから。

いま彼女がいったみたいに、生活習慣とかクセでしよう？ ふだんきちんとつきあってれば、父親らしい父親になるだろうけど。

津野 家長意識はないの？ この家は

自分がまともなくちゃいけないんだという責任感みたいな。

甲賀 それはぜんぜんないな。

津野 悠治にもないだろう？

悠治 フッフッフ。ちゃんとした家であつたこともないから。

津野 とすると、やっぱり鎌田さんか。甲賀 鎌田さんとか、あれ、自分の家でしよう、借家じゃなくて？

鎌田 うん。

甲賀 借家住まいじゃ、みっともなくて、家長なんかやられてられないもん。どんだん影が薄くなる。土地問題だよ、これは。

悠治 家族をなんとかしなきゃいけないっていう感じを家長意識っていつてるわけ？

津野 そういうことだろうな。

悠治 それはどっかに行った時はあるな。ふだんはないけど。

津野 どっかに行った時って？

悠治 たとえばね、スウェーデンに行つて食いつめてね、仕事がなくで、どこかに行く金もなくで、完全にいきづまっちゃった。そこで何か月か、ひたすら何かが起こるのを待ってるじゃない？ そういう時は家族をなんとかしなけりゃって思うわけ。思ったってどうなるわけじゃないけどね。

甲賀 まあ、そこで逃げちゃうようなやつもいるしね。

悠治 そう。ひとりで逃げちゃうこともできる。ミュージシャンというのは流れ者にきまってるから、アメリカにいてもさ、ここは一年でお金が切れましたっていうんで、次のお金がありそうなどこへ行くってことになるだろ。

そうすると家族のほうは、つきあいもなにもかも精算して知らない土地についていくか、あるいは、そこで別れるということになるわけ。うちの場合は、そこで別れたのね。

鎌田 おれんとこは関係の不安性みたいなことをいうね。いまでも家に電話したら、十八のやつが今晩は帰るかどうかって聞くんだよ。それから、おれはいったん家に帰ってから仕事場に行くことが多いから、今日は泊まってくのかどうかとか、しょっちゅう聞くね。

公子 自分が好かれてるかどうかっていうことは、すごく気になるみたい。

津野 子供が生きがいとかいうじゃない？ そういうのはどうなの？ 子供のためなら自分を犠牲にしてもいいとかさ。

悠治 そういう気持には、ぜんぜんならないな。

美恵 につくらしいわねえ。

鎌田 ハッハッハ、自分の仕事で精一杯だよな。

甲賀 おれはあるよ。犠牲みたいに大きなことにはならないけど。

鎌田 九州の友人の家に遊びにいった

ら、下の子供が生まれたばかりでさ。取材にいったも子供のことか心配で、取材を早くきりあげて帰ってくるんだっていった。おれ、絶対にそういうことないな。一日遅く帰ってくることはあつても、早く帰ってくることはないもんね。

悠治 小さい頃はあつたね。どっかに仕事に行つて、飛行機かなんかで帰ってくるわけだよ。夜になるでしょ。したら街の灯が見えてくるじゃない。そうするとやっぱりね。

甲賀 子供にはいっぱい食わせようとか、そういうのはない？ 食い物をちよつと残しておいてやるのか。

公子 それ、平野さん、あるね。

鎌田 おれ、子供はあんまり怒らないけど、女房は徹底的に怒るもんね。なんでそんなに怒るんだっていう感じのことあるよね。あれ、母親の安心感なの？

公子 こういうふうになってもらいた
いというのが、すごくつよいんじゃない
かな。私の場合、それがぜんぜんな
いわけ。とっても気分のわるいことし
か怒らないの、こっちが。

悠治 ふだん付き合いがあつてさ、怒
っても大丈夫だという安心感があるか
ら怒るんだよ。

美恵 それはあるね。

悠治 こっちなんか、ふだん付き合っ
てないからさ、まったく関係が切れち
ゃうと思うから、怒らないな。

鎌田 怒ると関係が切れると思う？

悠治 それはだって、子供はある程度
大きくなれば、親なんていなくなつて
いわけじゃない？ そこで怒りすぎ
て関係が切れるとまずいと思うのは、
やっぱり、いくら未練があるという
ことかな。

美恵 あるんですよ、未練が。

悠治 フッフッフ。

甲賀 だから親のこと心配するような
子にすればいいんだよ。
美恵 うちはもうそうだわ、ちっちゃ
い頃から。
鎌田 ハヤ君は野球に熱中してるんだ
ろう？

悠治 いまはサッカーゲーム。

鎌田 おれんとは、いまボクシング
ジムに行ってるよ。

津野 この頃の子って熱中力あるな。

釣りとかバソコンとかさ。

甲賀 でも、なりふりかまわずってん
じゃないね。タンは絵を習いに行つて
るわけよ、柳生ゲンちゃんここに。で
も、集中力がたりないんだよ。絵をか
く行為とかさ、まわりの雰囲気とかに
は熱中してるけど、四角い紙の中に絵
をかくという集中力がたりない。

津野 女の子っていうのはそうだね。
女の子は人間関係には熱中するけど、
切手収集とか、なにか特別の対象につ

甲賀 怒ると恐いからね、親は。子供
にとつて。いまこでガツと怒ると、
こいつはかなりこたえちゃうだろうと
いう遠慮みたいなものはあるよ。

公子 トイレに逃げこんじゃうもんね

鎌田 はあ。怒ることがないってのが
決定的なんだな、おれの場合。おれの
代わりに女房が怒ってるもんね。

美恵 代わりに怒ってるっていうのと
はちがうんじゃない？

悠治 でもさ、逆にいえば、そういう
人が一人いるから、もう一人が怒れる
んだよ、徹底的に。

鎌田 そう。正解。

美恵 ずるいと思わない？

公子 奥さんにしてみれば、二倍しっ
かりしなればっていう気持が、どっ
かにあるかもしれない。

甲賀 それじゃあ漫才じゃないか。ボ
ケとツツコミ。

鎌田 ハッハッハ、ボケートツツか。平野

いて熱中するようにはならないね。だ
けど人間関係については、すごい熱達
してるんだよ。人の表情の裏を読むと
か、かくしてあるものをパツと読みと
るとか。

美恵 そうよ。そうですよ。

津野 男は人間関係にたいしては、ど
うも熱中しきれないからさ。

公子 あたしは対象にまっすぐ行くの
がいいなと思うから、絵にも行かせた
んだけど、そういうことも人事関係に
とりこんじゃうのね。

甲賀 少しずつは集中するようになって
てるよ。だけど下手くそなんだ。でも
さ、うまくなるとだめになっちゃうわ
けよ。おれなんか、それでだめになっ
ちゃったから。

悠治 小さい頃うまいってのはだめだ
と思うよ。上の息子はピアノも作曲も
下手だ下手だと思ってたんだけど、基
準がちがうんだということがやっとな

さんちなんか、勉強どうなの？

甲賀 だめなんじゃないの。

津野 成績がいいって話は一回も聞い
たことないな。インテリとか芸術家の
子供で、成績がいいっていうのは、非
常に例が少ないんじゃないの。

鎌田 うちもわるいよ。なんかあるの
かねえ。

公子 でも、頭はいいわよ。

美恵 そうよ。頭がわるいんじゃない
のよねえ。

津野 やっぱり学校がわるいのか？

平野 親の価値観だよ。

公子 勉強しなくていいっていっちゃ
ってるからね。

美恵 あたし、しなくていいなんてい
ってないよ。でも、やらないもんね。

美恵 あたし、しなくていいなんてい
たいしたもんだね。

公子 そういうことじゃ世の中とおら
ないって、最近、向うがいいだしたか
ら、うちは。

かかってきたね。こっちがうまいと思
うようなことをやってんじゃないだめなん
だよ。できないほうがなんかなるわ
け。そう思うな。

鎌田 それはそうだな。おれなんか作
文かいてほめられたことなんて、いち
どもないよ。それで食ってるんだから
へんなもんだよ。

公子 そしたら成績わるくてもいい
ことになるんじゃない。

美恵 だからね、勉強しなくたってい
いと思うんだけど、成績の数字がわる
くてふるい落とされちゃうと気の毒だ
と思うから、まあ、標準ぐらいまでは
いってたほうがいいと思う。

鎌田 しかしさ、おれなんかぜんぜん
勉強しなかったけど、いまの子よりは
できたなって思うよ。

公子 だから、まわりがすごいよ。

美恵 こないだ鎌田さんにさ、ハヤが

勉強できないから、中学でて働いてもいいんじゃないかって相談したの。それしたら鎌田さんはね、そういう子こそ時間をかせいで、自分がやりたいというものがでてるまで待ってたほうがいいから、どんな学校でもやれっていった。

鎌田 そう思うよ。いま敗者復活戦っていうのはないんだもん。

悠治 むかしは学校の勉強がきらいなら野球選手になるとかさ、音楽でもやるといふうだったけど、いまはそうじゃないんだってね。成績がよくないと、音楽もできないみたいね。

鎌田 そうだよ。菓子職人だって、いまは国家試験があるんだからね。悠治が一所懸命お金つくってさ、息子に商店を経営させたとしたってさ、どんな店を倒産してるもん、商店は。

悠治 最近びっくりしたのはさ、落ちこぼれて普通の学校はついてけないと

いうことになるよ、養護施設に行かされちゃうんだってね。

甲賀 登校拒否した子を精神病院に入れちゃったりな。

鎌田 ハヤ君のことなんか、そんなに心配することないって。親がそれなりにがんばってればさ、大丈夫だよ。

美恵 ていうかさ、そういうものを、あの人自身もってるのよ。

鎌田 そうだよ。おれらが否定したって、絶対あるんだよ。

悠治 丈夫なもんだよね。あんなに悲惨な幼年時代を送ってさ。根性なかったらやってけなかったよね。フィリピンに行ったら便利がなくなったから、どうしてるかなと思って行ってみたら、一日中、大学構内でタクシー乗りまわしていたな。

津野 いくつぐらいの時？

悠治 四つか。親たちがでかけちゃって、一日中いないわけよ。それで近

所の子と遊ぶとかさ、自分でタクシーを止めて乗りまわしてるの。

津野 しかし、それはハヤの根性と同時に、フィリピンのタクシーのいい加減さをものごとくたってるよ。

悠治 そうそう。

鎌田 天才だよ、それはもう。

美恵 でも、やっぱりね、そのあとはしばらくひどかったね。

公子 自分のこと、すごくいいなと思っただけ。それで成功だと思っただけ。

美恵 そう、それでいいのよ。

津野 明るさっていうのは習得するものなんだよ。おれだってそうだよ。根は暗いんだよ。だから抵抗しなくちゃならない。それで、おれ、ポイスカウトに入ったんだもん、小学生の時。

鎌田 だったら向上心はあるんだ。

美恵 ハハハ、じゃあ、こんどはハヤと津野さんの対談やらなくちゃね。

キリコのヨリクツ

玖保キリコ



「玖保さん。コーンサラダ油なんかどうでしょうね」

「コーンサラダ油？」

「どうもろこし一本の値段から考えるとコーンサラダ油って、すっごく不思議だと思いませんか？ あれだけの油を取るのにかなりの量のとうもろこしが必要だと思いませんか？」

「はい。はい」

「でも、だからといって、その分のとうもろこしの代金が、かかっている割には、コーンサラダ油って、それほど

高くつくものでもないでしょ？」

「そーですよー」

「そういう、こう、その仕組みが分かってしまえば、何でもないようなことでも、ちょっと考えると不思議なことってあるでしょ」

「ありますねえ」

「だから、そういうのを書いてみたらどうかと思うんですよ」

「いいですねえ。それ、行きましょ。ゴマ油の話！」

「コーンサラダ油です！」

以上は何か？ という、水生通信

に載せるエッセイのテーマに関するやりとりである。テーマを決めて書いた方が書きやすいので、毎回、何かしらテーマを与えてもらっている。ただしもらったテーマ通りになるとは限らない。テーマを与えられ、そのテーマでいけそうなら問題はないし、だめなら別のことについて書くという風に、方向がはっきりするので、便宜上、私はテーマが必要なのだ。

そうか。ゴマ油か。言われてみればゴマって決して安くないのに、ゴマ油っていうのは、その安くないゴマが、大量に必要とされる割には、そんなに高くない気がする。確かにゴマ油は不思議だ。あれ？ コーンサラダ油だっけ？ まあ、原理は同じだ。探せばそういうことが世の中にもっと在るはずだ。これは、いけそうだ。にこにこ。

テーマを与えられて、2週間以上たつた。なのに、何も考えつかない。おかしい。そのテの不思議はあるはずなのに。確かにある。確信できる。あるのに出てこない。頭の中で象の大部分が騒いでいる。彼らは出たがっているし私も出してあげたいのだが、それができない。もしくは、情報のいっばいしまったコンピュータが目の前にあるのにアウトプットできないはがゆさ。

疑問に思うことを片っぱしから、「何で？ どうして？」と聞きたがったというエジソンの話がふと頭をよぎる。

そういうえば、私は生物、化学、物理というのが苦手であった。それらが好きな人に言わせると、どうしてそうなるのか、と疑問に思うことが解明されていくのがおもしろいのだそうだ。

考えてみれば、私は「何故だろう」という関心を何かに対して持ったということが少ない。

不思議だと思ったことに対しては、それを丸ごと不思議のままにのみこんでしまう。不思議を不思議、変を変と思わないところが私にはあるようだ。きっとそういう人間は、理数系が不得意なのだ。好奇心が原動力となるような学問はダメなのだ。

コーンサラダ油の類似項目が見つからないのはそのためなのだ。

では、私は好奇心が全くない人間なのか？

シーン1 喫茶店。コーヒーを飲み飲み語らう友人と私。

私「この間知り合いになった○○さんてね。すーごくおもしろいの」友人「へー。良かったじゃない。で？

年は？ この学校出たの？」(彼女は○○さんが男性である場合必ずこう聞く。ほとんど仲人のおばさんのり)

私「……。そんな話はしなかった……」友人「ダメじゃない。肝心なこと聞かなくちゃ」

私「……。そうか。そういうことって肝心なことなのか」

友人「そーよ！ ほーんとに関心ないんだから！」

シーン2 茶の間。TVを見ている母と私。母、がさそと写真の束を取り出す。

母「ねー、ほら、これ。この間の旅行のときの写真」

私「へー。ほー」

母「でね、こっちは法事のときで。

ほら、ほら、これ裏の家の……」

私「ふーん」

母「こっちの△△ちゃんの結婚式のと

きの写真見た？」

私「……。 (視線だけ投げる)」

母「……。 (視線だけ投げる)」

私「……。 (テレビに集中しているフリをしている)」

母「もう、いい！ もう、あなたなんか写真見せてあげない！ ほんつとに関心ないんだから」

確かに、他人に対する関心が、少々薄い気がしないでもない。

はっきり言って、冷たいと自分でも思うときがある。

しかし、こういう時、周囲が要求する関心とか好奇心というものは、お天気の話に等しい種類のものだ。

ほとんど内容のないものだ。

元氣な時だったらたまにつき合ってもよい。

いかにも関心があるようなフリをし

「まあ。そうなの。それで」

とか調子を合わせることもできる。

しかし、儀礼的なつき合いならまだしも、どうして、親や友人に、

「ほーんとにいいお天気ですねー。ほほー」

てなニュアンスのお愛想をふりまかなければいけないのか。

私は正直者だぞ。

本当なら、友人に向かって、

「そんな会話なんか興味ない」と言いたい。

本当なら母に向かって、

「誰が誰だか区別がつかない親せきに對する関心は、はっきり言ってないです」

と言いたい。

言わずに曖昧にすますのは、私のやさしさなのだ。

もっとくわしく説明すると、冷たい人間だと思われたくないのだ。

一番関心があるのは自分です、なんて、あまり他人には言っていない気がするが、これだけ、くどくどこういうことを書くというのは、やはり自分に興味があるからなのだろう。

何だか、すごくイヤなところに話がそれてしまったが……。ぶつぶつ。

えー、「何故だろう」という種類の好奇心は、ちょっと思いつかなかったが、一応、私にも好奇心はあるのである。

一つは、2回もシンガポールに行ったのに、とうとう見つけることができなかつたドリアン。

もう一つは、イギリスの小説にしばしば登場するクリスマスプディング。

私は持ち得る限りの想像力を駆使して、この二つの味について、あれこれと考え、これらに對する好奇心が満たされる日を夢見ている。

料理がすべて・特集

田川律

〔同情〕

自分のやっていることに対する他人の反応というものは、時々意外なものである、という体験をした。

川崎の生活クラブ生協で、ちょっとした集まりを定期的にやっているが、そんなある日、その中のひとりの女性（生活クラブ生協で活動している人のほとんどが主婦だ）が、十一月号の本誌のぼくの欄をパラパラと読んで、妙

に感心したように「なんか、わびしいわね。わたしの老後を見てみたい」と言った。多分、鮭のカス汁のくだりであまったカス汁に毎日違うものを入れて食べるくだりへの発言なのだが、これにはそう聞かされたぼくの方がびっくりした。

だって、ぼくはべつにわびしい暮しゆえに、そのように毎日残り物に少しづつなにかを加えているのではなく、むしろ逆に楽しみとしてそうしている

のだ。『実験』というものや『練習』というものが、あまり成立しないのが食生活だけに、実験や練習は、そのまま本番になる。だから、できるだけ大胆にかわった組み合わせを楽しみ、その中で、いろんな発見ができれば、と思っているのだが、料理のベテランの主婦から見ると、それがひとり暮らしのわびしさにうつったのかも知れない。

となると、この欄はいつも、そういう同情の眼で読まれているのだろうか、一抹の不安がわいた。ぼく自身は一度だってそんな気になったことはない。もし、わびしい、と思ったら、たちまちどこか友人のところへ出かけて行くか、友人を呼んできて、複数の人間で食べることをするだろう。そんなことは、これまで起っていない。むしろ、少年の日々に、母親代りをしていた時代には、さすがにまだ日の高いうちから、石油缶を改造した「カンテキ

でご飯をたかなくてはいけなかったりして、辛い思いをしたことはある。

けれども、五十歳になった今、ぼくはむしろ、とても楽しく料理をしているし、後片づけをしている。

ま、でも、ぼくの人生観からいえばどう思われてもいいけれど――。

*

（ハンバーグ）

その川崎生協で、肉類をまとめてかなり買った。挽肉、ハム、豚の塊などだ。そこでまず、ハンバーグを作った。ハンバーグといえは、かねてから不思議なのは、どうしてだ円形なのか、ということだ。三年ほど前、黒色テント68/71の関西地方のツアーに料理人としてついていった時、「つなぎ」と呼ばれる中間食で、ハンバーグ・クレープを作った。クレープ、といっても原

宿の街角でおいしそうな匂いで焼いているヤツほど本格的でなく、ぼくは昔から「マキマキ」と呼んでいる小麦粉を卵と牛乳で薄目に溶いて焼くだけのものだが、これだけだと、まさに「つなぎ」にならないので、これでハンバーグを巻こうと思いついた。

そのためには、寸角（一寸角の棒）のように細長いハンバーグを焼くか、要するに四角い大きいハンバーグを焼いて、これを切ればいい、と思いついて、そういうのを四十本ばかり作ったことがある。以来、ハンバーグがだ円形、というのはなぜだろう、べつにどんな形だっという、と思っでいて、今回もできるだけ奇妙な形にした。

もっとも、そうすると、ちょっと見には、まるでお好み焼でも焼いているように見えるのだ。

*

〔豚の角煮〕

豚の塊の方は、どうしようか、またロースト・ポークにしようかと迷っている時、新聞の料理欄に豚の角煮が出ていた。じつはこないだいささか失敗をしている。というのも、圧力鍋で作ったのだが、ひどく焦げつかせてしまったのだ。理由は、はじめから味付けをして、圧力鍋を使ったからだ。

そこで、今回は、豚の塊を大雑把に切り、圧力鍋に水を入れ、そこへほうり込んで、なにやかやと香辛料を加えて（この時は、コショウ、オレガノ、八角、などであった）少々塩をふってまず、水煮をした。大成功。

それから、普通の鍋にこれを移し、サトウ、ミリン、しょうこう酒、ショウ油を加え、そこにサツマ芋の輪切りをたしてコトコトと煮た。なかなかのどきの角煮で、時々やろう、と思った。

*

(チョコレート)

角煮を作った次の日、両国の国技館へ中島みゆきを見に行った。あと数日で海外へ行く、という時だったので、幾つかの打ち合せをその前に大急ぎですませ、なにしろ国技館、いつも相撲やってる時には、みんな弁当ひるげてるし、食物には事欠かないだろうと、かけつけて入った途端、食べる物はいっさい売ってない、と主催者にいわれてガックリ。カバンの底の方に小さい板チョコが二枚だけ入っていたので、とりあえず、それでガマンすることにした。

ところが、コンサートがひどいものだった。まず、セット。まるでリヒアルト・シュトラウスか、ワグナーのオペラでもやるような大げさなもの。中島みゆきは、その大げさなセットの奥

の方から、後光をうけて登場する。天の岩戸ではないか、これでは。その次に音がひどい。ステージの両側に、巨大なスピーカー・ボックスを十個ずつ並べて、しかもそこから最大級の音を出す。サクスがソロをしても、館内全部を百フォンを越すような音が響きわたる。その上、アレンジがどうにも古くさい。三台もキーボードを使っているが、いや三台も使っているからかただ大きな音を出すためにだけ弾いているような感じだ。新居さんに見せたかったなあ。

というわけで、空腹はいよいよ激しくなった。やっと終って、一目散に大井町まで出て、ご飯を食べようと思ったら、まんの悪い。時には、まんが悪いもの。まず最初に入った「とんかつ屋」は「もうご飯がありませんから」と断られた。次に、寿司・鰻、と書いてある店で鰻でも食べようと思ったら

こちらの服装をいちべつしてから「何にします?」と来た。「鰻を」というと「鰻はもう売り切れた」とのこと。

「ホンマかいな」と思ったが、黙って店を出た。どうも鰻だけ食べるお客さんはいらない、というような気もしたが。それでも、捨う神もいて、焼肉屋で、レバ刺とビビンバ、という奇妙な取り合せを注文して食べた。

*

(昆布茶)

お正月料理、というものにはほとんど無縁である。こどもだった戦争中は立派な寺に住んでいたのだが、それでもお正月にどんな料理を食べたのかはまったく覚えがない。ただ、きまつて正月には昆布茶を飲んでいただけははっきり覚えてる。最近のように、粉になっっているのではなく、たしか、

だし昆布をたき出した形の昆布茶である。それとも昆布茶用昆布、があったのだらうか。さすがにそこまででは考えなかった。

その後は、以前もここで書いたような貧乏暮らしだから、正月といえはお餅があるだけでいい、というような正月が続いていた。ずっと大人になってからもだから、正月にいるんな料理をしないと思わなかった。「おせち料理」は、ふだん毎日料理を作らされている主婦を台所から解放するためだ、という文章をどっかで読んだ気もするが、ぼくなんかのような気まぐれ主夫は、冷えきった芋の煮っころがしを、毎日食べるぐらいなら、なんか作った方がよほどいい、と考えてしまう。

だいたい暮れになると、野菜や魚が妙に高くなる。たいていの店は三が日が済めば開いているのだから、たった三日の分だけ材料を買えばいい、それ

も一日目は雑煮でもいい、となればほとんどのいらぬのだ。

だけど、一度だけ、おせち料理をかなり熱心に作った年がある。熱心とはいっても、せいぜい、クリ・キントン、芋の煮っころがし、鮭のマリネ、を作ったぐらい。あとはハムを切るとか、カマボコを切るとか、その程度のことだった。それでも、すぐに食べあきて「おせち料理は友だちのうちで食べさせて貰うにかぎる」とつくづく思い、次の年からは二度と、そんなことをしようと考えない。

*

(レゲエお好み焼屋)

と書くと、なんのこっちゃ、ということになるが、要するにレゲエの好きな人が店でレゲエをかけながらお好み焼屋をしてるだけのこと。とはいっても

の、店が二階にあるのだが、一階から二階へあがる階段は、ラスタ・カラーといわれる、赤・黄・緑の三色に塗られているし、メニューは、片面にポップ・マーリーの写真が全面にベタベタは貼ってあり、もう片面には、ラスタ・カラーと黒を使って、椰子の木のある浜辺に月が登っている。切り絵。がしてあるのだから、かなりのもの。

もっともそこへ行った日は、その直前に食事をしたあとだったので、なんにも食べる気がしなくて、四十度のラム・コルバを一杯だけ飲んだだけ。だからどんな味のお好み焼かは、今もってわからない。しかし、マスターに「かきとじゃがいも」のお好み焼の作り方を教えてあげたら、面白がっていたから次に行った時には、それがメニューにのっているかもしれない。

*

〈大食い〉

大学時代は、親しい友だちのうちへ行くとき「バケツでお茶をわかさなくては」とか「おひつ一杯の飯を食った」とかいわれたものだが、この頃は「小食だ」とよくいわれる。

今まで聞いた話の中で、胃がとても大きいと思われた人は、佐藤さん、とかいう人のことだ。

この人の友人が佐藤さんの家へ泊りに行って、次の日の朝出勤する時、国電秋葉原の駅で、突然「牛乳でも飲んでいこう」と佐藤さんがいうと、KIOSKへ行き「いつものヤツ」と店員にいうと、店員は黙って、牛乳を十本出したら、佐藤さんはそれをあれよあれよという間に飲んだ。そのしばらくあとで、その会社で健康診断があったそうだが、バリウムを飲んで胃のレントゲンをとる時、くだんの佐藤さんは

三人前のバリウムを飲んで、なおかつまだ胃がうつらなかつたそうだ。

もっともぼくなんか、バリウムと聞くと、胃ではなくて、肺に何度かバリウムを入れた時の苦しさを思い出してゾツとする。大学五年の時に、原因不明の熱が続いて、結核の疑いで入院したのだが、いくら検査をしても結核菌が出ないので、肺のレントゲン撮影をするためにバリウムを飲まれた（肺へ飲めるわけではないから、注入されたと書くべきだろうか）。

喉を麻酔して、管を通して入れられるのもつらいが、撮影が終わったら、そのままにされることだ。胃の場合は、そのまま出るが、肺の場合はそうはいかない。咳をするたびに痰といっしょに出てくる。それは何日も続き、大変つらかった。

結果は、それでも結核ではなく、最終的には、気管支拡張症、という名を

つけられた。そのせいも、今でも時々突然コーヒーやお茶が気管に流れ込んで、ひどくむせたりする。それは誰にでも起こることなのだろうが、どうもぼくの場合には、その頻度がひとよりも多いという気がする。

〈カンタン料理〉

津野さんは、会う人（女に限られていた）に「あなたが得意な五分以内でできる料理」というのを聞いてまわっているそうだが、最近聞いた中では、挽肉を丸めて水の中で煮て、そのまわりに白菜を切っけて入れてスープ・ストックで味付けする、というのがあった。なんとなく日本に古くからある「ドジョウと豆腐の鍋」のよいうな気がしないでもない。もっとも挽肉はドジョウと違って、あついからと

いって、白菜の中へ逃げこんだりはしないのだが――。

おかずがない時に、次のように工夫した人がいるそうだ。ご飯を炊く。ふいてきたら、その中の一部をとり出す。残りはそのままご飯としてたく。とり出した方にしょう油を加え、べつの鍋で、これもご飯としてたく。こちをおかずにして、残りでたいたご飯の方を食べるというのだ。これはカンタン料理どころか、ずい分手間がかかっている。

（お菓子のなる木）

こどもの頃うたっていた歌で、今はどうしても見つからないし、うたわれてもない歌、というのがあつた。

その中のひとつに、「お菓子のなる木」という歌がある。これがその歌の

題名なのかどうかもわからない。今覚えてるのは「お菓子のなる木を植えました。お菓子のなる木を植えたなら三年三月で実がなつた。ずらりと並んだチョコレート」というくらいだけである。しかも驚くべきことにこの歌は

二番あるいは三番が「お金のなる木を植えました」というのだったという記憶がある。もっとも「お金」の方は、三年三月たつたら、どんな「お金」がなつたのか、まったく覚えていない。メロディも、この部分ははっきり覚えていてうたえるのだが、誰にうたえて聞かせても、そんな歌は知らない、というばかりだし「日本童謡集」のたぐいをずい分みただけでも、まだこの歌に出喰わしてない。読者の方でもし知っている人がいたら、ぜひ知らせて欲しいと思います。

それにしても大胆な歌やなあ。

〈精進料理〉

脂っこいものばかりを毎日食べる気はしないが、さりとて精進料理、というのにもぼくにはおもしろいと思えない。それだけ、ぜい沢になってしまったのだらうか。こないだも入谷の普茶料理というのを食べさせて貰ったが、なかどれもこれも食べた気がしない物ばかりが出てきた、という気がする。その店の自慢だという「こんにゃくの刺身」というのも、べつにこんにゃくが薄く切つてあるだけ、という以上の気になれなかつた。でも（値は）高そうという感じだつた。

懐石料理、は精進料理ではないそうだが、このあいだ大学の同級生にあって、滋賀県の八日市市になにやら有名な店があつて、そこはひとり二万八千円で、懐石料理を食べさせるのだと

いう。その値段を聞いただけで、もうおそろしくなる。ただいろいろ出てくる料理の種類を聞いたが、中で、ステーキの上には漬を刻んでのせてあるのがとても良かったそうだ。なるほどなあ。その店では、料理につける柿の葉を、店の人たちがいちいち山へ出かけて形、色、などが良いものを見つけてくるのだそうだ。ほとんど人件費を払わされてる、という感じだ。

*

（ガムを嗜んで）

友人の大塚まさじの古いレパートリーにこの歌がある。七四年に、かれがグループを解散するコンサートに、一年前うちに居候していたローレンスの当時のアメリカでの同居人、ゲイル・カタギリという日系人が来日して見に行つて、会場のみんなにガムを配

って大うけしたことがある。

ついこのあいだ、ジョン・レノンがオノ・ヨーコと七二年の八月にニューヨークで開いたチャリティ・コンサートでのビデオを見ていたら、なんとジョンはステージにいる間じゅう、ずっとガムを嗜んでいるのだ。曲と曲の合間に喋っている時には、はっきりそうとわかるが、うたっている時にはまったくわからない。その時はガムはどういう状態になっているのだろうか。上顎にくっつけているのか、奥歯の横にでもしまっておくのか。よくあんな器用なことができるものだ、つくづく感心した。これこそ、ガムを嗜んで“そのものだ”。

もっとも大塚ちゃんの歌は、そのあと「戸口に立とう、通りを抜けるとそこは丸木橋」と続き、ガムを嗜んで歌をうたう、とはひとつともいってないし、大塚ちゃんとはこれまでずい分あ

ちこちへ同行したが、またただの一度もかれがガムを嗜んでうたったのを見たことはない。

*

（ネグロス）

フィリピンのネグロス島の飢餓は、このところ新聞でも大きく取りあげられている。その記事を読むたびに、二年前に訪れたネグロスを思い出す。その時のことは以前もここに書いたような気がするが、カンゾ、といえればあれほど簡素な暮らしはなかった。竹らしきものを編んで作った高床式の家は、表から裏までブラインド越しに外を見るかのようにすかして見える。それは家財道具らしいものが、いっさいないからだ。電気はきてないから電気製品はいっさいない。年中暖かいので、布団の類はこれまたいっさいない。タンス

も押入れもない。たまたまぼくたちはそこへ行く前に、首都のバコロドの市場で干魚を買っていったので、それを焼いて出してくれたが、おそろしく魚はかれらにとって、大変な御馳走だったに違いない。あとはご飯だけ。箸を使わず手で食べる。ぼくがこどもの頃の田舎での生活を、ここでは村中がやっているのだ。しかもここには、八百屋も乾物屋もない。

次の日、砂糖きび畑を見学しに行つて、炎天下を歩いて、もうちょっとで日射病になりかけたところまで、昔と同じだった。

*

（但馬牛を楽しむ会）

という名を大きく印刷したダイレクタ・メールが来た。中を開けるとパンフレットが入っていて「本場」純但馬

牛肉』の歳末特価販売のご案内」も同封されている。それによると、御歳暮用ステーキ・セットは、ヒレまたはロースが1キロで二万円（！）と書かれている。安いもので1キロで一万円である。それでいて、パンフレットには「牛肉はどうして高い？」という一文

があり「牛肉が家庭に届くまでの従来システムの複雑さを知ったら、まさかとお思いになることでしょう。ある生産者から売られた牛は、多いときには十近くの業者を経て、やっと肉屋の店頭に並びます。そして一業者を経るごとに、価格が上がるのは当然のことです。こうした複雑な流通システムがある限り、牛肉の値は上がるばかりで、不足がちな但馬牛の肉など、途方もない価格になってしまいます。『但馬牛を楽しむ会』は、そんなばかげた流通システムに対する、挑戦でもあるのです。世界一おいしい但馬牛のステーキ

を、ご家庭で、ふつうの値段でお楽しみいただけます」と書いてある。

1キロ、二万円や一万円が、ふつうの値段なのか。そういえば、このところ牛肉なんか買わないから、相場というものがわからないけど、ずい分高くなってるわけや。

*

（スベア・リブ）

同じ肉でも、こちらはだいが安い。1キロ、千四百円ぐらいではないか。これの食べ方はいろいろある。一時こっていたのは、ここにも登場した唐揚げ。オープンがあるうちなら、そこで焼くのがおいしい。一番カントンなのは、塩、コショウだけして焼くもの。タレ、の場合のタレは、今では焼肉用のタレを使ってもいいのかもしれない。ぼくは、自分でいつものようにええ加

減なタレを作る。ニンニク、ニンジン、タマネギ、ショウガをかなり大量にすりおろし、そこにワイン、トマト、ケチャップ、ウースター・ソース、一味唐辛子、などを加えてよく混ぜ、ここにスベア・リブを一時間ほどつけいてオーブンで焼く。これは鶏の手羽先でやってもおいしい。

*

〈海の家〉

といっても、べつに海岸にあるよしず張りの建物でなく、高田馬場にある食べ物屋だが、これについてはすでに一度書いた気もするが、つい最近も二度ほど行って改めて感心した。昼の定食が六百円。刺身、肉豆腐、などいくつかの種類がある。それだけならべつにふつうの定食屋と同じだが、店にはほかにいろんなものが置いてあり、自

由に食べられる。納豆、のり、ちりめんじゃこ、大根おろし、貝のつくだ煮、梅干、白菜の漬物、いかの塩辛。だいたいこれだけのものが、たっぷり大皿にそれぞれ盛ってあり、それぞれ食べたいだけ小皿にとってきて食べればいい。早くいえば、ホテルの朝食の和食バイキングだ。

ご飯たべ放題、味噌汁のみ放題、その上帰る時に、ミカンを二個ぐらいつデザートに渡してくれる。これでしめて六百円。一階が主に調理場、二階が二十人ぐらいのスペース。働いている人は板前一人、お手伝い一人、お客さんの手伝い二人、それに六十近いママさんらしい人。もちろん、この種の店の多くがそうであるように、夜は一杯のみ屋、それも、生けす、などがあるから、少々高い目のそれ。にしても六百円でやっていけるとしたら、よそがよほどもうけているか、ここが赤字

でもサービスしているのか。

*

〈椎の葉に盛る〉

久しぶりに徹夜で原稿を書いた。さすがの夜長もそろそろ白々と明けてくる。間もなく成田へ向かう。

家があれば、けに盛る飯(いい)を草枕、旅にしあれば、椎の葉に盛る。

これは万葉集の中で、ぼくが覚えていた数少ない食べ物の歌のひとつ。もっともこれから出かけて行くところのいずこでも、椎の葉に盛ってご飯を食べるところはなさそうだが、それでもどこか日常から離れているところはあ。また、行く先々で料理してこなくちゃあ。

埋草通信 東北の神武たち 鎌田慧

Sクンとは、三沢の反戦喫茶「アウル」であった。十六、七年前のことである。そのとき彼は二一、二歳だったから、もう三七、八にはなったのだろう。「ことしは結婚する！」と自信と決意をこめた年賀状がきたこともあったが、結婚を表明したのは、そのとき一度だけだった。幸か不幸か、それっきりになってしまったようである。

「アウル」は、岩国の「ほびつ」とならぶ反戦喫茶として知られていたよ。うだが、わたしはその両方とも知らなかった。「むつ小川原開発」の取材にいったときに、「変な青年たちがいま

すよ」と三沢市のローカル紙発行人に教えてもらったような気がする。覗いてみると、ベ平連が米兵相手につくったバーだった。

いまよりはるかに若かったわたしは彼らを相手に、むつ小川原開発反対闘争の重要性をアジリ、ビラやパンフレットをつくるのを手伝い、ヒッチハイクの仕方を教えてもらって開発予定地の六ヶ所村に通うようになった。やがて、共産党や社会党も遅ればせながら運動にはいりこみ、鹿島から変な右翼も乗りこんで、例によって過激派キャンペーンがはじまった。となると、ヒゲをはやした汚れた服装の怪し気な青

年たちと東京からときどきやってくるルポライター風情では歯がたたず、あっさり排除されてしまったのだった。おりしも高名なる宇井純氏までが、右翼青年によって集会場から放逐されてしまったのだから、推して知るべしである。

たぶん、それとは別の理由だったろうが、アウルは解散した。店の責任者はいま日市連の「幹部」となり、栃木県の農家に入婿した青年は、さいきん宇都宮で「六ヶ所村核燃料基地反対」の団体をつくって、小室等のコンサートをひらいたりしている。

結婚のチャンスを失ったSクンは、出稼ぎで生活してきた。わたしもはたらいたことのある旭硝子の船橋工場におなじころいたり、埼玉の菓子工場でもわたしの知人の出稼ぎ労働者と会ったり、その後いくつかの奇遇があった。奇遇といえは、昨年、彼は六ヶ所村

で自衛隊の兵員輸送車にはねとばされ
いまは治療に通いながら、自衛隊から
保障金を取るチャンスを握った。反戦
の奇縁である。

六ヶ所村の反開発闘争は、無惨にも
敗退した。右翼青年や彼をもちあげ
ていた大新聞の記者たちは、もはや村
に入ることもない。喧伝された石油コ
ンビナートの大工業地帯は、石油タン
クを並べただけの役立たずの石油備蓄
基地になった。三井不動産などによっ
て買収された膨大な農地は、荒れるに
まかせるばかり。それで焦ったのか、
六ヶ所村は保守派だけの村議会でさえ
ろくに論議することなく、受け入れを
決めた、と発表している。電事連(九
電力の利益調整団体)と県は、核サイ
クル基地反対の漁協組会長を入院中に
解任したり、反対派漁師を逮捕させたり、
やりたい放題。開発反対同盟は両
手で教えるまでに減っていたが、核サ

イクル反対の農漁民は、またふえだし
た。

Sクンは東京に出稼ぎにくるたびに
科学者たちに会い、現地での学習会を
準備してきた。この十五年、下北半島
でひらかれた原子力関係の集会のほと
んどに彼が陰ではたらいっている。

昨年十二月一日の村長選は、自民党
公認、電事連応援の古川伊勢松(69)
と組合長を解任され、息子が逮捕され
た滝口作兵エ(59)との争いになった。
Sクンは二週間ほど泊りこんだ。手弁
当で泊りこんで駆けまわったのは、S
クンばかりでなかった。

八戸に住むKクンもまた、三〇半ば
の独身者である。千葉の工場ではたら
いたあと、さいきんになって八戸に帰
ってきたのだが、就職することもなく
六ヶ所村に通っている。三沢に住むN
クンも三〇すぎ。彼は教師志望で、ま
いとし採用試験を受けているが、いま

だに浪人である。父は基地労働者だっ
たが、若いとき死去、母が一人息子の
彼を育ててきた。いまでも彼は母のス
ネかじりである。もうひとり、むつ
市に住むHクンである。富山生まれの
彼は、いま一人芝居をやっている松橋
勇蔵の東京時代の仲間だったが、むつ
市に住みついて漁師になった。

核サイクル基地をめぐる六ヶ所村長
選は、これら、無業の独身者たちと子
どもの将来を心配するおっかあたちの
エネルギーによってたたかわれた。

古川伊勢松は、「暗愚の帝王」と称
された鈴木善幸をさらに数十倍も愚鈍
にした男で、話しても何が結論なのか
わからない話術の持主である。彼らの
陣営は、「滝口候補には千票もやらな
い」とナメ切っていたが、フタをあけ
てみると、滝口票は二千五百票と投票
数の四〇パーセントを占めた。古川と
核サイクルへの批判票だが、血縁や買

収で奪われた票を考えると、反対はも
っと大きいと考えることができる。

開票のあと、顔見知りの独身者たち
と、滝口家の二階の座敷で酒を呑み、
枕を並べて寝た。六ヶ所村へ行ったと
きは、たいがい彼らの誰かと一緒に行
動するのだが、ときたま、Sクンから
東京の自宅に命令口調の電話がかかっ
てくる。すると、わたしは従わなけれ
ばならないのである。

ひそかにわたしは、彼らを「東北の
神武たち」と呼んでいる。深沢七郎の
貧しくて嫁をもらえない次男(オンジ)
たちに倣ったことだが、彼らは深沢
の主人公よりもはるかに明るい。それ
は仕事と女性を拒否しているためなの
か、拒否されているからなのか、その
どっちかはきいたこともないが、党派
にも属さず、運動からの挫折感も感じ
ないことだけは、共通しているようだ
ある。

水牛かたより情報

●カセット「カラワン・農村漁村キャ
ラバン・ライブ84」

もう一昨年のことになりますが、カラ
ワンのストラチャイとモンコンが来日し
三カ月間かけて、秋田県本庄市から沖
縄は石垣島までの農村漁村をキャラバ
ンしました。このキャラバンを企画・
実行した三里塚の小泉英政さんとR・
リケットさんが制作した実況版カセッ
トです。カラワンの古い曲から新しい
曲まで18曲入って80分、ステレオ録音。
送料共二千円。問い合わせと申し込み

先は

千葉県成田市東峰71 小泉英政
TEL 0476・32・0425

(八巻)

●(鳥の歌一九八六) ↓山谷

84年の暮、山谷で映画作家佐藤満夫
が右翼やくざに殺された。亡命先から
フランコの支配するスペインのために
カタロニア民謡(鳥の歌)をひいたカ
ザルスにならって、労働者の街山谷に
向けてのコンサート。出演はA・M・U
S・I・K、L・I・T・R・A・N・S、ルナパーク
・アンサンブル、梅津和時、高橋悠治、
友部正人、風巻隆、みらん、河内屋菊
水丸、原爆オナニーズ、他。2月2日
2時-9時、スーパーロフトKIND
O(西武新宿線都立家政駅下車)97
0・8217) 前売二千円、当日二千
五百円。問い合わせはTEL 341・48
45(平井) (高橋)

走る・その一

デイヴィッド・グッドマン

妙な臭いがする。自分である。ズボン下もシャツもひどく汗臭い。ランニングスーツも臭い。このまえ、洗わないうで縁側に掛けて乾かしたからだ。そういうえば、縁側にみかんを取りにいっただ娘はゆうべ「死ぬー！」とやって、鼻をつまんで出てきたっけ。

冷たい畳のうえに横になって、身体をのびしはじめる。左の股関節がどうしてもいうことをきかない。右の膝をまげ、足を尻のほうにひっぱりながら、

股が直角になるように左の足をまっすぐのばす準備体操をやる。横になって、天井からぶらさがっている蜘蛛の巣をながめているかぎりは何ともないが、上半身をおこして、左手で左足の爪先をつかんで足の筋肉をのばそうとする。と、股関節に針がつきさったように、痛い。夏には、ほとんど歩けなくなつて、三週間ランニングをやめて、水泳に切り換えなければならぬほど痛くなることもあった。

玄関の上框に腰をおろす。運動靴の中に丸めて入れてある靴下をとりだす。ああ、いやだ。湿っている。右の踝につけるサポーターもじっとり冷たい。仕方がない。サポーターを足につけて、靴下を履く。靴はどろどろ。くつひもをゆるめて、靴をぬじりながら履く。左足のほうには、小さな袋が、ペロのようにくつひもについている。名刺と千円札一枚がはいっている。名刺は、

倒れて口がきけなかった場合、名前と連絡先がわかるようにだ。千円札はジュース代。

くつひもを結ぶ。指が冷たくて、うまくいかない。具合が悪かったら、すぐ帰ってもいいよ、毎回四十五分走らなければならぬと決まってるわけじゃないし、と自分にいいきかせながらドアをあけて、外に出る。

* * *

さあ、きょうはどっちにいこうか。ヘッドホンからながれてくるノータ・ヘンドリックスの唄「アイ・スエット」に歩調をあわせながら、御所のほうに向かう。少し調子でたかなと思いつつ、河原町通りをよこぎる。もう大丈夫だ。きょうも、なんとかいけそう

だ。「わたしのからだがかうごく／頭より

早くうごく／記憶はない／あんたのことで心がいっぱい／時間はほとんど過ぎるが／なにも考えられない／なにも感じられないが／あんたの感じが忘れられない」唄の文句を聞きながら、御所の広い敷地にはいる。なんとなく聖域を冒瀆しているみたいな気持ちになる。今はやりの言葉でいえば、ウォークマンを片手にどしんどしん走るぼくの肉体という記号と御所という記号とは、相容れないはずのものである。その二つの記号が意味するものはあまりにもかけはなれているからだ。しかしいやな気持ちではない。ぼくはむしろ快感をおぼえる。ぼくは観光客としてでもなければ、ましてや皇民としてここに現れ出たのではない。あくまでも御所の白い築地と平行に走る、同化しない存在だ。

同化か。九月にぼくは小熊秀雄という詩人が一九三五年に書いた「長

秋夜」という長編叙事詩を訳して、異質の存在と共存する手段として、日本人が同化の思想にたよったことを、ふたたび考えた。「長秋夜」は、合併後、日本が朝鮮に対して実施した文化同化政策の一部だった「白衣着用禁止」についての作品だ。朝鮮を占領してから日本は朝鮮人に日本名を名のらせたり、朝鮮語使用を禁じたりして、朝鮮の文化を根こそぎにしようとしたことは、漠然と知っていたが、小熊の詩を読んで、その政策が朝鮮民族にとってなにを意味したか、はじめて痛感した。ぼくは丸太町・烏丸の交差点に向かっている。朝鮮人の息子をもつ父親として御所を走りぬげる。同化の問題はけっしてぼくたちの生活と無関係ではない。韓国は馬山生まれの息子カイは一昨年六月、うちの家族に加わった。カイを迎えるのは、ペルーからきたばかりの娘の場合とはかなり違った体験

であった。娘のヤエルは生後二日にばかりの所にきた。十七カ月できたカイはそれに比べてだいぶ歳をくっていた。ヤエルには〈過去〉はなかったが、カイには知られざる十七カ月の〈過去〉があった。その間にいるいるなことがあったにちがいないし、ぼくらはその知られざる〈過去〉ととりくまなければならなかった。それはいまでも続いている。

問題は、その十七カ月の、朝鮮人としての〈過去〉をいかにして生かすことができるか、ということである。朝鮮人のアイデンティティを少しでも残してやることは無理だろうか。ヤエルとカイのために、多元多様な世界を保証してやりたい。

「アイ・スエット／びしょぬれになって／わたしはうごきつづけて」耳に轟くすさまじいビートにのって、ぼくは走りつづけている。

●タリー・ブラウン、ニューヨーク
(ローザ・フォン・ブラウンハイム)

からすの羽のようなつげまつ毛が重たくはばたくと、ひっこんだ目がじっと見つめている。二重あご。新鮮さのない伴奏ピアノのリズムにのってほとんど無表情の語りだし。なにかあたらしいことが起こりそうな気分。

やがてブルースのメロディーやきまきりきった歌手のしぐさが現れ。そうかもう60年代じゃない。あの頃はタリーも、ほかのみんなとおなじようにデカダンスを演じていたのだった。時代の波がひくと、芸能界で浮かび上がるう

と努力している「その他大勢」の姿がのこった。ミュージカル女優で売出し、一時はいいところまでいったのに、舞台の事故で足を折ってから、毎日ちいさなクラブでうたい、毎月の労災保障金をうけとりにいく。

●ニューヨーク・アンダーグラウンドの60年代はテレビのなかで生きているような祭の日々だった。それが突然終わってしまおうと、ひとりひとりの努力がやっとささえている味気ないアメリカの現実が顔をだす。

あの頃のことどもたちがおとなになって、60年代をおもいだす。それは年をとってから青春をふりかえるのとはちがって、幼年時代をとりまく「物のおしえ」(パゾリーニ)に帰るのだ。デカダンスもこれだから本番だ。決して目覚めることのないテレビの夢だ。

●そして船は行く(フェリーニ)

のなかで貴族、音楽家、ボーイラーマンと難民。階級対立も歌手ののど自慢と難民の踊り、甲板の大合唱の輪になって。ヴェルディ風スペクタクル。

にわとりに催眠術をかけるバス歌手の声。クリスタル・グラスで「楽興の時」を合奏する老音楽家たち。機関室の機械音さえも圧倒するテノールのアリア。みんな過ぎさった日の芸だ。最後に、沈む船のなかで半分水につかりながら、手動映写機でいまは亡きプリマドンナのフィルムをまわす男。

●映画音楽もヴェルディやロッシーニのコーラージュとまがいものでできていた。フェリーニの演出はいつもながらたいへん音楽的。

●ノスフェラトゥ(ヴェルナー・ヘルツォーク)

深い山の中、日没とともに幻のように浮かびあがる古城。吸血鬼の刺りあ

げた頭、毛細血管の浮いた、かびのような顔、とがった付け耳、おくらされたなめらかな身のこなしが、陰の方で白く。それに対してこの世の代理人はピンクの皮膚をして、毛深く、デリカシーを欠いた衝動的なうごきが、不安とあせりをかくして、光のあたる側にとどまっている。

近代世界の表側から追放されて貧血症にかかったエロスが、こんなにみじめな姿で「愛をわけてください」と哀願しているのに、健全な市民は不動産の取引にしか関心がないのだ。

だが見よ。こうもりやねずみみなみにおとしめられても、闇の力は文明の中心に喰いこんでいた。ひとりのドラキユラが心臓を杭で打ち抜かれても、もうひとりの化身が世界を変えるために砂漠へ乗りだしていく。愛の永続革命のおはなしでした。

とここで、ドラキユラ城に近づくに

●電子的編集技術がビデオに映画的時間をとりもどしたとすれば、映画の方は最先端のテクノロジーを手放さずに無声映画の原点にもどろうとしてオペラになるのか。それともオペラにかかわる映画はそれ自体がオペラにならずにはいけないのか。フェリーニのテーマが過去への旅であるからには、映画という媒体自体もサイレント時代を通りこしてそのひとつ前の大衆娯楽であるオペラにまでさかのぼらずにはいけないのか。この映画はメディア相互のたわむれを内容としているように見える。

最初の波止場のシーン。モノクロームのサイレントで映画の撮影を撮影している。だれもがカメラを見ながら演技している、その自然さ。やがて画面にうすく色がついてくるが、しばらくはカメラを気にしながらの演技はつづく。

●ビニール製の海と空の間に浮かぶ船

つれて「ラインの黄金」のはじめの部分がきこえてくるが、たったひとつの和音のゆらぎだけでできているこの音楽にも闇の力がそなわっているにちがいない。そのわずかなゆらぎが、とてもゆたかなものにきこえる。

●こんなテーマがヴァーグナーの音楽もろとも現在のものとして生きているドイツというところは、おなじ地球の上とはおもえないほど遠い。たぶん向う側でもおなじ思いでこちらの背中を見ていることだろう。同時代という概念も近代の神話にすぎなくて、顔をあわせていてもそれぞれはちがう星の上のちがう時間に生きているのかもしれない。

●そうおもいながらも、異質な文化を平然とたのしんでいられるのは、生きていることとテレビを見ることとの間にそれほどちがいがなくなってきたからにちがいない。

〈コンサート〉

①「ヒューイ・ルイス」のコンサートを武道館で見た。チケットを他人に頼んでおいたので、行ってみたら2階席の一番奥でした。チケットは他人まかせにしたらダメだと反省した。周りの若者達が楽しそうに踊っているのが不思議でしたし、元気の嫌のようなヒューイがこちらの方に顔を向けるだけでキヤーと悲鳴を上げるのも驚きでした。今年、僕もツアーを予定していますし、皆こんな風に楽しむんだなと思うと、とても参考になります。2階席の奥の

一人一人までちゃんと一体感をもって、素晴らしいコンサートだった。パンドのアディショナル・プラス・セクションがとても上手いので後で聞いたら、昔有名だった「タワー・オブ・パワ―」というバンドのメンバーでした。現在はレコード会社との契約もなく、のんびり寂しく活動している様です。

②「ジョコラータ」を草月ホールで見た。ボーカルのかおりさんはとても美しく、又某音大の音楽科に行っているので、とても歌が上手い(ピッチが良い、技巧的だ)。前のヒューイなんかと違い、去年、日本に定着したアートのやパフォーマンス・ブームを真面目に継承して凝った舞台を見せてくれました。一部はレトロっぽいキャバレー・ミュージック風、パントマイムやコントの様なことも演っていた。多分、音大の仲間風な室内オケが居た。舞台上から吊り下げられた譜面灯りが暗い舞

台でお屋様みたいに光っていて、とてもキレイ。ピアノの娘がオケのアレンジしているのだけど中々それ風。二部はロック・アンサンブル。変拍子あり、ファンクありのダイナミックな演奏。しかし歌詞がほとんどイタリア語なので分からない。聞きに来ている子達はほとんどメーカーズ・ブランドを着ていて、オシャレだけれど黒っぽい。皆文化服装学院の学生っぽく見える。客席とステージも何となくおともだち感覚。かおりちゃんはニューウェイブの宝塚なのかな……?!

③クリスマス・イブの晩に「R・Cサクセション」を武道館で見る。ここ2年ぐらい事務所問題等で混迷を続けていた清志郎達が、自分達で事務所を作り、レコード会社も変わり、とても元気がなった。新しいアルバム「ハートのエース」は好き。ジャケットも好き。一万人の「武道館ベイビー」達も元氣

やはり肉体的なもの強い。十何年も同じメンツで音楽しているというのは異常だが美しい。思わず涙ぐんでしまったのだ。

④矢野顯子の「ブローチ」コンサート・ツアーを演じた。矢野の独特な反骨精神と流行感覚がミックスされた企画だ。立花ハジメのビデオ・モニターを使った舞台に2台のピアノ、矢野顯子・高橋悠治・坂本龍一だけが居るという簡素な設定。踊るコンサートにしか行ったことのない子達とは違って、どうしていいか分からなかったんじゃないかなと思いますが、そこが矢野の狙い目でもあるので「静かに聴きなさい」と一喝。久しぶりに地方都市を回ったんですが、驚くべき整備のされ方ですね。これはもう僕の知っていた日本の姿ではない。大変リッチな国になっちゃっていたんですね、日本って。それとO.Aの普及もすごい。ウチの弱

小プロダクションやレコード会社も、ワイプロ・パソコン・ファックス・Eメール等々ありますものね。どの地方都市に行っても必ず大手家電メーカーのO.Aショップがありました。

〈レコーディング〉

相変わらずスタジオ奴隷です。ソロ・アルバムをレコーディング中ですがメンバーの居ないバンドという設定。4月のツアーまでにはメンバーを決めます。或る日、来日中のガタリ氏が遊びに来ました。フェアライトの代理店の人の様に色々説明・実演してあげたのでとても喜んで頂けました。サンプリング・ミュージックにおける再属領化ということを熱っぽく語っていただきました。哲学者らしいりっぱな人だと感じました。

〈DJ〉

NHK「サウンド・ストリート」で初めて公開録音をしました。クリスマス

ス・イブのオン・エアなのでサービスに清志郎と「きよしこの夜」を歌い喜ばれました。

〈BOOK〉

「音楽機械論」吉本隆明さんと音楽についてあれこれ話をし、フェアライトで曲もつくりましたので、ソノシートをつけました。菊地信義さんの装丁が気に入っています。

〈VIDEO〉

「TV WAR」今や懐かしいつくば万博のジャンボ・トロンを使ってRADICAL TVとパフォーマンスした、その記録です。時間がなかったので録音を三日であげた記録的なものです。

〈CLUB〉

東京にはロンドンやニューヨークの様なクラブ・シーンがないので子供達はコンサートであんなに踊るのでしょうか?!?!?!?

編集後記

年があらたまる直前に原稿はそろった。原稿をわたしてしまい、はれやかに新年を祝っているであろう執筆者たちの顔をおもいうかべると、元旦からワープロを打ったりしてはたらくのは、なんだかおもしろくないので、それはやめ。はれやかに遊んでからにしよう。「トラの親、トラの子を語る」は、トラ年の父親だけの座談会の予定ではじめたのだが、なぜか話が一般論へと拡散しがちで、オブザーバーの母親ふたりがついつい口をだしてしまった、という結果となった。そうそう、このなかでお母さんみたい、と言われているデイヴィッドとは、今月から連載をは

じめたデイヴィッド・グッドマンその人のこと。ふたつを重ねて読むと、錯綜する現実が錯綜したままに垣間見えてきて水牛のだなと、わたしは第一番目の読者としておもうのだった。半ば冬眠しているような水牛楽団は、春になるのを待っている。桜の花の咲くころに、あたらしいメンバーとなった吉原すみれの入団記念コンサートをひらく。ゲスト多彩。PAの新居章夫さんがPAしながら演奏もしてしまうというように、コンサートをつくっている人がみんなステージに顔をみせるようなものをかんがえている。

水牛からのお年玉。おいしいタイ料理の店を紹介しましょう。十二月に開店したばかりの「バンタイ」。新宿区歌舞伎町1-23-14第一メトロビル3F 電話207-0068。歌舞伎町の一番街通りを踏国通りから入った左側。食べ物とはこういうものだと思えてきます。甘い辛さをどうぞ。(八巻)

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座番号 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
* 本誌は次の書店にあります。

模範舎(新宿) ☎三五二一三五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三一九九六一
ワンラブブックス(下北沢)
☎四一一一八三〇二
アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三三八〇

水牛通信 第八巻第一号 一九八六年
一月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田
正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎二六
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 鶴トライ
プリントショップ